

# 「人工知能技術適用によるスマート社会の実現」

## 終了時評価報告書（案）概要

### 目 次

分科会委員名簿 .....	1
評価概要（案） .....	2
評点結果 .....	4

## はじめに

本書は、NEDO技術委員・技術委員会等規程第32条に基づき研究評価委員会において設置された「人工知能技術適用によるスマート社会の実現」（終了時評価）の研究評価委員会分科会（2023年11月10日）において策定した評価報告書（案）の概要であり、NEDO技術委員・技術委員会等規程第33条の規定に基づき、第76回研究評価委員会（2024年3月18日）にて、その評価結果について報告するものである。

2024年3月

国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構  
研究評価委員会「人工知能技術適用によるスマート社会の実現」分科会  
（終了時評価）

分科会長 梅田 和昇

「人工知能技術適用によるスマート社会の実現」(終了時評価)

分科会委員名簿

	氏名	所属、役職
分科会長	うめだ かずのり 梅田 和昇	中央大学 理工学部 学部長 教授 大学院 理工学研究科委員長
分科会長 代理	しのだ こういち 篠田 浩一	東京工業大学 情報理工学院 教授
委員	うえだ かずひろ 植田 一博	東京大学* 大学院総合文化研究科 広域科学専攻 教授
	おぎの たけし 荻野 武	一般社団法人 日本惣菜協会 AI・ロボット推進イノベーション担当フェロー
	さとう ひさひこ 佐藤 寿彦	株式会社 プレシジョン 代表取締役 社長
	さわたに ゆりこ 澤谷 由里子	名古屋商科大学ビジネススクール 教授
	ひだか ようすけ 日高 洋祐	株式会社 MaaS Tech Japan 代表取締役 CEO 一般社団法人 JCoMaaS 理事 兼 事務局長

敬称略、五十音順

注\*：実施者の一部と同一大学であるが、所属が異なるため（実施者：東京大学 IRT 研究機構、大学院医学系研究科、空間情報科学研究センター、工学系研究科 航空宇宙工学専攻、高齢社会総合研究機構、大学院工学系研究科、技術経営学専攻、大学院情報理工学研究科、大学院新領域創成科学研究科、生産技術研究所、人工物工学研究センター、先端科学技術研究センター、地球観測データ統融合連携研究機構、総括プロジェクト機構、未来ビジョン研究センター）「NEDO 技術委員・技術委員会等規程(平成30年11月15日改正)」第35条（評価における利害関係者の排除）により、利害関係はないとする。

# 「人工知能技術適用によるスマート社会の実現」（終了時評価）

## 評価概要（案）

### 1. 評価

#### 1. 1 意義・アウトカム（社会実装）達成までの道筋

本事業は、2017年の人工知能技術戦略で明示された社会課題である「生産性」「健康、医療・介護」「空間の移動」分野に人工知能技術を応用し、38兆7000億円の市場を獲得することをアウトカム目標としていた。中間評価を受け、個別テーマについてアウトカムを想定している2030年時点からバックキャストし、目標を達成するための出口戦略である社会実装シナリオを作成したことなどは評価できる。また、知財マネジメント基本方針に沿って、個々のテーマの特性に応じた、オープン・クローズ戦略、知財戦略、標準化戦略がとられ適切である。

一方で、「アウトカム達成までの道筋」がどのように見直されたかをより明確に示す必要があると考えられる。

今後、人工知能技術の応用は、データが十分に利活用できるかが鍵であることから、データに関するオープン化・標準化・権利化についてもさらなる検討を望みたい。

#### 1. 2 目標及び達成状況

本事業は、全体のアウトカム目標を定め、個別テーマそれぞれでもアウトカムを明確にし、複数のテーマで実用化され、社会実装を達成していることは評価できる。また、アウトプット目標のプロジェクト全体での達成度は高く、植物工場、交通信号制御、分子標的薬創出、判断根拠の言語化など、複数のテーマで想定以上の成果を挙げており、今後の波及効果も期待できる。また当初設定した目標以外にも、若手人材育成や、広報活動について顕著な成果が認められる。

一方で、本事業は十分なアウトカムが見込めると考えられるが、アウトカム目標設定を市場創出だけでなく、多様なゴールを掲げ、柔軟に見直すべきだったと思われる。

今後、今回開発された人工知能技術を活用できるソリューションを整理し、社会実装したい企業とユーザーに広めて大きな市場に育てていくことを期待したい。

### 1. 3 マネジメント

実施体制は、技術開発と社会実装それぞれのために2名のPLをアサインし、多くの外部有識者を技術推進委員として配し、NEDOのプロジェクトマネージャー及び担当者、そして実施者間の連携が良く機能し、予期しない事象にも臨機応変に対応し、優れていたと判断できる。また、このプロジェクト期間中に、人工知能技術が著しく進歩し、外部環境も大きく変化する中、実施者と綿密に話し合い、適切に目標指標や計画の変更を行い、柔軟なプロジェクトマネジメントが行なわれ、また、ステージゲートも適切に機能し、研究テーマ内における進捗管理や、テーマ間での連携が適切に行われた点は高く評価できる。また、情報発信の取り組みも十分に行われ、YouTube動画作成や積極的な展示会出展なども評価できる。

今後、社会実装を重要視する事業であれば、外部有識者として、研究者、技術者だけでなく、より多くの事業化支援の実務経験者が参画することを期待したい。

## 2. 評点結果

評価項目・評価基準	各委員の評価								評点
1. 意義・アウトカム（社会実装）達成までの道筋									
(1) アウトカム達成までの道筋	B	A	A	A	A	A	B		2.7
(2) 知的財産・標準化戦略	A	A	B	A	A	A	A		2.9
2. 目標及び達成状況									
(1) アウトカム目標及び達成見込み	C	A	B	B	A	B	B		2.1
(2) アウトプット目標及び達成状況	A	A	A	A	A	A	A		3.0
3. マネジメント									
(1) 実施体制	A	A	A	A	B	A	A		2.9
(2) 研究開発計画	A	A	B	A	A	A	A		2.9

### 《判定基準》

A：評価基準に適合し、非常に優れている。

B：評価基準に適合しているが、より望ましくするための改善点もある。

C：評価基準に一部適合しておらず、改善が必要である。

D：評価基準に適合しておらず、抜本的な改善が必要である。

(注) 評点は A=3、B=2、C=1、D=0 として事務局が数値に換算・平均して算出。